

◇ 卷頭随想 ◇

知 識 を 測 る

学校長 武 田 二 郎

NHKの人気番組クイズ面白ゼミナールは鈴木健二アナウンサーのせりふ。
知るは楽しみなりと申しまして、知識を沢山もつことは人生を楽しくしてくれるもので
ございます。

ではじまります。このように知識が多いとか、少ないとかは昔からいわれてきたことですが、それが長さとか重さのように単位を定めて測定できるものと考えられるようになったのは最近のことに過ぎません。

話を非常に簡単にして、仙台市といわき市の毎朝の気象状況を気象台に通報するものとしましょう。天候は晴、曇、霧、雨の4種類とします。いま晴を00、曇を10、霧を01、雨を11で表わして、これを第1のコードと呼びます。このコードを用いると、どちらの市の気象も0、1の2文字で表わせます。このことを L_1 (仙台) = L_1 (いわき) = 2とします。また晴を0、曇を10、霧を110、雨を111とするのを第2のコードとします。このコードを用いても気象の通報ができます。いま仙台市で晴、曇、霧、雨となる確率はともに $\frac{1}{4}$ で等しいのに対して、いわき市では晴の日が多くて、確率は晴 $\frac{1}{2}$ 、曇 $\frac{1}{4}$ 、霧 $\frac{1}{8}$ 、雨 $\frac{1}{8}$ とします。もちろん仮想上の数字です。このとき第2のコードを用いると両市の通報の文字数の平均は一致しません。

$$L_2(\text{仙 台}) = (1+2+3+3)/4 = \frac{9}{4} > 2 = L_1(\text{仙 台})$$
$$L_2(\text{いわき}) = 1 \times \frac{1}{2} + 2 \times \frac{1}{4} + 3 \times \frac{1}{8} + 3 \times \frac{1}{8} = \frac{3}{2} < 2 = L_1(\text{いわき})$$

このちがいは何に因るのでしょうか。それは仙台では晴曇霧雨の確率が等しいので、気象の予想がしにくいのに、いわきでは晴が多くて予想し易いこと、難かしくいうと仙台の方がいわきよりエントロピーが大きいことに原因があります。仙台市の気象を0、1で表わすには平均2文字がどうしても必要なのに、いわきでは1.5文字で間に合うのです。2元文字(binary digit)をbitと省略して、情報量の単位とします。仙台の気象通報には2ビットの情報が入り、いわきの通報には1.5ビットの情報があるといわれます。

このような考察から、知識とか情報(information)には測定される量としての性格があり、物質、エネルギーと同様に工学の対象となり得ることが認知されたのです。物体の運動の性質を解明したニュートンの力学の誕生に較べられるような成果といって良いと思います。

目 次

卷頭随想	1	図書館利用状況一覧	6
読書のすすめ	2	新着図書目録	7
視聴覚関係ニュース	3	図書館関係今年度の顔触れ	9
私の読書	4		

読書のすすめ

請売りの読書論 3 題

一般科教官 佐々木 史 郎

◎その1 旅と読書

大学1年の時、植生学の分野で著名なM教授の講義を聴講した。その第1回目の講義でM教授曰く、「学生はできる限り旅行せよ。旅行する金のない者は本を読め。」と。旅行と読書を並べた点が漠然とした疑問を感じさせはしたが、M教授はそのことに何の注釈もつけなかったし、私自身も深く考えてみることもなく聞き流していた。それから十余年がたち、時には学生諸君に「読書のすすめ」めいたことも口にする立場になった今、この言葉を自分なりに解釈してみると、おおよそ以下のようなだろうか。

旅と読書に共通していえること、それは「『非日常』との出会い」および「『日常』の見直し」の機会を与えてくれるということであろう。見知らぬ土地に行き、ふだん自分をとりまいている世界とは大きく異なった世界に触れて、そこから自分の日常を見直すのが旅であろうし、日々通いなれた道にもその都度新たな発見をするというのも旅心に裏打ちされた営みであろう。それと似たことを居ながらにして可能にしてくれるのが読書なのではあるまいか。自分が全く知らなかった世界が存在することを知り、ごく当たり前のこととして何ら疑問を感じることのなかった日常的な振舞いや思考のすみずみに新たな発見をするということ、換言すれば、自分の身についた思考や行動の様式、あるいは見慣れた光景といったものが、いつでも、どこでも、誰にでも通用する絶対的なものではなく、時・場・人の限られた所でのみ成り立ちうる相対的なものにすぎないのを実感し、その先にさらに面白い世界を見出すということ、それが旅の、そして読書の興趣の一つということなのだろう。

◎その2 本1本

同じ頃、歴史学のK教授が講義中にある学生に向かって、「君、昨年1年間で本をどのくらい読んだかね。」「はい、〇冊ぐらいです。」「〇冊？、馬鹿者！ 本を冊数で数えるのは商売人のやり方である。学生なら本

を10本読んだ、20本読んだといいなさい。」本を積み重ねて床から天井に届くまでの分量が「1本」である。いわゆる「乱読のすすめ」であって、とにかく手当たり次第読みまくれというわけである。「あまりにも色々ありすぎて、どこから手をつけていいかわからない」というのは逃げ口上にすぎない。パッと手にとって読み進んでいくうちにだんだん自分の読書スタイルもできてくるし、自分が求める書物というものも明らかになってくるものである。出版業界がこれだけ隆盛の世の中にあって、「どこから手をつけていいのかわからない」というのは、ヴァイキング料理の席で、「どこから食べていいのかわからない」と悩むようなものであろう。「名著・大作を読破せねば」などと気負わずに、まず軽く1冊を手にとることが「1本」に、さらには「3畳1間」「ビル1棟」につながっていくのである。私自身、趣味を問われて「読書」と答えるほどの読み手ではないが、そのような態度で書物に対するうちに、自分の専攻分野以外ではたとえば東山魁夷を知り、周はじめを知り、都筑道雄を知り、森本哲郎を知った。いずれも他からの薦めによってではなく、自分で見出したものであり、それぞれに幸福な出会いだったと思っている。

◎その3 「読書の量も金次第」ではない

先輩のH曰く。「読み手と本の間には不思議な因縁があり、高い金を払って買っても結局読まない本もある一方、買わなくてもいつのまにか読んでしまう本もある。本につき込む金額や買い込む冊数（本数？）は読書量のパラメータにはならない。」

奨学金とアルバイトのみに頼っていた学生時代から比べれば、教官研究費その他で書籍購入量がふえた現在、この言葉を改めて痛感している次第である。時によると、買いはしたものの読んでいない「積ん読」量よりも、買わずに読んでしまった「借り読」量の方が上回る月もあるほどである。私が授業中に学生諸君に薦める本は大抵安い文庫本であるが、「買って読め」とはなるべく言わないようにしている。

ぼくの体験的読書論？

電気工学科教官 山崎 数彦

5年ほど前のことになるが、はからずも本校に赴任することになった。身の回りの整理を始めてみると書物(単行本、雑誌、学会誌など)がかなり多いことに気がついた。ぼくは読書が得意だというわけでもないが、十数年間同一個所に住んでいると、いろいろな書物が意外に増えるものだ、あらためて感心したものでした。そこで、これらの“蔵書”を“減量”することにした。取捨選択の基準を(1)「過去1年間、目を通さなかったものは捨てる。」ことを原則とし、しかし(2)「今後、目を通す可能性の特に高いもののみを取る。」こととし、思い切って実行した。その結果、残った蔵書は当初のおおよそ3分の1に減量することができました。その後は、本校の図書館の本をできるだけ利用することにして現在にいたっています。

そんなわけで、ぼくの身近にある本で印象に残っているものというと比較的古い(数年～十年くらい)ものがある。その中の一つに高木東六著「ぼくの音楽論」(日本放送出版協会刊)があります。著者は著名な作曲家、音楽家であります。「家族そろって歌合戦」(数年前の日曜日午後のテレビの定時番組)の審査員長として、ユーモアの中にも厳しさとやさしさと思ひやりにあふれた審査評をして、いかにも音楽が好きでたまらないという感じの人です。高木さんは茨城県磯原で小学校時代を過ごしたのですが、ピアノに対する並々ならぬあこがれ、そして生れながらの素晴らしい素質に恵まれ、「自分の生涯を音楽にかけることになる生い立ち」が記されています。テレビの画面から見受けられる独特な人柄と雰囲気さらにはぼくの印象を強めたようです。ぼくには音楽の技術的なことは分かりませんが、「音楽というのは楽しくて素敵なもの。そして誰もがみんな美しく感じることでできるやさしい芸術である。」ことを納得させ、安心させてくれた本でした。

さて、昨今は図書館、書店に豊富な量の本が読み手を待っています。しかし、読む側にしても時間に限りがあるので読む本を選定するには少々知恵を働かす必要があります。いつの頃からかぼくは次のような方法を探っていることに気がつきました。それは、まず表題をみるのは勿論ですが、次にその本の終りの方の3分の1くらいのところを読んでみて自分の希望に合うかどうかを確かめるのです。

ところで、人それぞれに「本の読みやすい場所」があると思うのですが、ぼくには電車の中がその一つです。もっとも、初めての路線であれば窓外の移り変わる風景を賞でることを優先するでしょうが、先日出張の際、駅のプラットフォームの売店でつい衝動買い(上に述べた方法で内容を確認して、実は車中で読もうと別に1冊用意していたのですが)した本があります。森政弘著「非まじめのすすめ」(講談社刊のポケット版)著者はロボット工学の第一人者(折込みの著者紹介による)であります。まったく型やぶりの発想法……ぐうたらなまじめや、頭から湯気をたてるまじめ、を超えた「非まじめ」発想によって問題を解決しようと提唱しているのです。この本の一節に「非まじめ読書法」があります。

「本を買った時に、もっともまじめな読み方では第1ページから読みにかかる。だが、第1ページの前書きから読みにかかったらたいは眠くなる。おもしろい本ならいいが、このころは少しむづかしい本はすぐ眠けをさそう。

そこで第1ページからは読まずに、例えば終り3分の1から後に向って読みにかかる。普通一番大事なところはそのへんに出てくるからである。しかし、終り3分の1から読んでゆくと、用語とか、定義とか、前の話の関連とかでつかかるところが必ず出てくる。つかかたら前をみてあゝそうかということでは乗り越えられる。またつかかると、つかかたらまた前をみて、というふうにして終りまでゆくとほとんど大事なところだけが読める。」

本の種類にもよるけれど、一つの読書法としてぼくにも体験的に納得できる。

視聴覚関係ニュース

☆Ⅰ 閲覧室のビデオ・モニタ

ビブリアNo51で紹介したように閲覧室にVTR(ビデオカセットレコーダ)とモニタを一式設置してあり、学生諸君が図書館に備え付けのビデオプログラムを視聴できます。(図書借出し窓口へ申込む)

現在までの利用状況は表1のようです。また、借出しカセットも新たに☆Ⅳのものが増えていきます。今後もしどしどし利用して下さい。

☆Ⅱ ビデオ利用状況

学科学年別利用者数(58.5～59.3)表1

科	学年	1	2	3	4	5	計
M		0	0	24	2	4	30
E		3	0	9	3	3	18
C		4	12	1	0	3	20
土		3	2	10	0	0	15
計		10	14	44	5	10	83

☆Ⅲ 月別利用者数(表2)

月別	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計
人日	9	20	15	1	6	5	5	7	6	9	0	83

☆Ⅳ 新着借出用ビデオカセット一覧(増加分)

- 1 ウルトラアイ (1)スキーを探る 各30分
(2)これが流水だ
(3)通信と映像
- 2 デジタル時代のエース 30分
- 3 超しS1の世界 30分
- 4 90年代への材料革命 30分
- 5 新幹線技術のすべて 30分
- 6 ビデオカメラ入門 各30分
(1)身近なテーマでスイッチオン
(2)見やすい画面

私 の 読 書

ひつじが丘にて

4E 志賀幸恵

ある人から三浦綾子の「ひつじが丘」をプレゼントされた。読み終えるのに幾らもかからなかったが、2度、3度と読み返した。というのは、1度読んだあとで、考えてしまったからである。テーマは「愛とは何ぞや？」答えられる人は一体どれくらいいるだろう。

この小説の主人公は広野奈緒美、牧師の一人娘である。彼女はいつの頃からか心にすきま風が吹くのを感ず、何となく反抗的な態度をとってみたりする。そんな彼女の前に、真面目な青年竹山と、その友人杉原が現れる。杉原の無邪気な瞳にひかれ、駆け落ち同様に家を出る奈緒美。しかし、同棲生活は不幸だった。本当の愛について、奈緒美は考え始める。

愛とは、好きな人といっしょにいたいと思う心、相手を大切に思うこと、生活を共にし、肉体関係を結ぶこと。今まで私はその程度にしか思わなかった。けれど、それだけではないという気がした。愛は永遠であるはずなのに、人間同士の愛は何ともろいとか。ほんの小さな行きちがいで、人間の愛は壊れてしまう。永遠の愛とはどんなものなのか？

その愛に気づいたとき、杉原は愛人と手を切ろうと決心した。そして愛人の差し出す別れの杯を受けるが、それには睡眠薬が入っていた。雪の中、杉原は眠りにひきこまれてしまう。奈緒美とのしこりも消えないままで、彼が残したものは1枚の絵だった。それは十字架上のキリストの血をあびながら、その足もとで救いを乞う彼自身の姿だった。永遠の愛、それは神の愛である。汚れた、醜い人間を、一方的に愛する神の愛である。信じない人が多いだろう。しかし、みんなが盆正月に拝んでいるものは、人間の作ったものではないか。そんなものに何の力があるのか。神とは、全知全能の存在のはず、だからただ1人で十分ではないか。全能の神は、汚れた人間をも清めることができるのだ。何の代償も求めず、一方的な愛によって、である。ただひたすら与える愛によって、である。清めの代償となったのは、金でも、宝でもない。キリストの命であった。彼は単なる歴史上の人物ではなく、神御自身だったのだ。「神の愛がわかる」ということは、知識としてわかることとは違う。ある日、ある時、心で理解するのである。

現在、洗礼を受ける準備をしている私には、死の直前の杉原の気持ちがよくわかる。神の素晴らしさがよくわかる。イエス＝キリストは死んだ。しかしよみがえったのだ。聖書の中にこんな言葉がある。

「人がその友のために命を捨てること、これよりも大きな愛はない。」(マタイによる福音書) 人間のために肉体の命を捨てたイエスは、身をもってこの言葉を示したのだ。それがわかった時、私も杉原のように、十字架のもとにひざまづいたのである。

ドン・キホーテ

4M-5 小笠原 宏

まず初めに感じたことは、このドン＝キホーテという作品は、人間の悲しみを奥深くユーモアで包みこんだ、人の心をゆさぶるような作品だということです。

しかし、底ぬけの明るいユーモアはなかったように思います。いつも底には人間が背負っている運命の悲哀がただよっていたように思います。

行為そのものは馬鹿げていて愉快でありながら、それ故にかえって主人公ドン＝キホーテがあわれになり、ドン＝キホーテを好きにならないではいられなくなった感じです。あまりにも純情一路で人を疑うことをしない、それでいて自分の力不相応な強い正義感と人間愛を持ちつづけ、自分の描いたあこがれに向かってひた走りにつき進んでいく姿は、たいへんすばらしく、感動しました。

人々は狂人ドン＝キホーテをからかったり、あざむいたり、痛いめにあわせたりしました。しかし、どうしてもあざ笑えなかったものが人間の心の中にあると思います。それを忠僕サンチョが代表してあらわしていると思います。主人のともをしてあんなにひどいめにあったはずのサンチョが、最後になぜ身も世もなく泣きくずれたのでしょうか。ひどいめにあっても、やはり主人ドン＝キホーテ＝「アロンソ・ケサダ」だんなを愛していたからではないでしょうか。

「ドン＝キホーテ」はおもしろかったけれど、後になんとなくさびしいような悲しいような気持ちが残りました。けれども強きをくじき弱きを助ける正義の騎士、ドン＝キホーテにたいへん感動するとともに、おろかな行為のなかにも、自己の理想に向かって純粋に生きようとする人の、敬愛すべき姿があることを教えられました。

「青函トンネル大爆裂」を読んで

4工 佐藤 勉

「青函トンネル大爆裂」。書店のかたすみでふと見つけた本である。前に青函トンネルについての講演を聞いて興味を持ったことがあったので、すぐ読んでみたくなった。そして少し読んでみると内容がリアルで、詳しく、私たちの興味をそそる様なものであった。これがこの本を手に入れた動機である。

今までは感想文というと世界文学や日本文学といった類のものであったので、今回はSF的な小説について書いてみる。まずあらずじにふれよう。この小説では青函トンネルは新幹線として使われている。このトンネルにアカシヤ209号という、いまの「やまびこ号」に相当する列車が入っている。その列車には「青函トンネル廃止同盟」と名のる大学生4人が他の乗客に混じって乗りこんでいた。列車がトンネルに入る時、トンネルは異常湧水の危険をかかえ、また、トンネルに恨みをもつ地元民によってトンネル内に発破がかけられていた。そして、例の大学生4人が運転室に乗り込んで運転手を脅迫し、アカシヤ209号をトンネルの一番深い所に止めさせてしまった。三重の危機が一度にトンネルを襲った。だが大学生4人は、説得され、列車の発車を許した。しかし、国鉄の技術ミスによる異常湧水でトンネルは破壊されていく。発破は爆発しなかったが…。大学生4人は捕まって、自分たちがトンネルを爆破したのだと自白させられてしまった。そして最後に国鉄は技術ミスを隠してしまう。これがあらずじである。

この話は現実の青函トンネルの立場を迫真の実証性で描いている。実際青函トンネルができることで廃止される青函連絡船を続けさせたい人々や、トンネル工事について恨む者もいる。だからこの小説は現実の問題をうまく生かしたものであると思う。ただ一つ気づくことは、この作者は青函トンネルにはあまり好意を持っていないということだ。それは小説書き出し部でわかる。

この小説は実際の工事方法、概要が新聞記事のごとく描いてあるので、読み易い。どの分野の人が読んでも充分楽しめると思う。なお作者は「東京大地震M8」などで有名な生田直親である。



「狭き門」

4E 永山和郎

聖書の中のルカ伝第13章24節にこの本の題名がキリストの言葉としてはいつている。

「力を尽して狭き門より入れ。滅びにいたる門は大きく、その路は広くこれより入る者多し。生命にいたる門は狭く、その路は細く、これを見出す者少し。」主人公ジェロームはこの「見出す者」の一人になろうと決心した。

しかしこれだけではこの本「狭き門」は語れない。実際この本を最後まで読み終えた時点で私は、内容の理解はおそらく半分ぐらいに感じた。なぜなら本文中で、「徳の追求」や「霊的完成」とかいった宗教的な考え方は私には難しく、具体的に理解しにくいものであったから……。

とにかくそういう難しいところを少々省いて大体の内容を簡単に言えば、この物語の主人公ジェロームは、二歳年上の従姉のアリサを恋するようになる。一方、アリサもこの従弟を愛するようになるが、肉感的で奔放な母親に対する反発から彼女は、宗教的な考えを持ち始めていく。ところで、うぶなジェロームの眼にはそうしたアリサの見せる愛のしぐさや恋の裏には「禁欲主義」の陰影をおびているだけに、度々意見がくいちがっていっこうに通じなくなってしまふ。そしていよいよアリサは、天上の喜びを求めてこの世を去る。というような感じであるが、この二人、私には哀れとしか思えない。あまりにも互いに感情が繊細で純粋な心を持っているから余計に。

このアリサとジェロームは、本文中でよく文通をしているのだけれど、彼女の手紙は相変わらずジェロームを不安な気持ちにさせているので、私はそれからずっと、彼女は彼に愛想を尽かしたのだらうと思っていた。しかし、それは見事に裏切られた。彼女は彼を避けていながらも彼を本当に愛していたなんて、私は少しおかしかった。遠く離れている方が愛せるなんて「絶望的な愛」ではないかと。

恋を犠牲にしてまで死を選んだアリサ。彼女は本当に根が暗い。かといって自分はどうなんだと言われれば、多少暗い面もあるかもしれないがアリサにはかなわない。はっきり言って、こういう難しく、つき合いくい女性、私は好きになれない。どんなに優れているところがあろうとも、手を引くだろう。

それにしてもこの著者アンドレ・ジイド。よくここまでプラトニックラブを表現したものだ。経験がものを言っているとしか言いようがない本だった。

最近私は「読書」という読書をしていない。まづい傾向だ。直したい。実際私は読書は嫌いな方ではない。(好きな方でもないかもしれない) なぜなら、読書は、意味や感情をたどって行く時の軽い困難、その困難をだんだん上手に征服して行く時の自分でも気づかずにいるあの得意な気持ちといったものが、自己の魂の満足を付け足してくれるからである。

「青年時代」を読んで

4M 中根孝志

ぼくは、現在「青年時代」の真っただ中にいる。まだ子供とも言えるし、もう大人だとも言えるどっちつかずの年代だ。そんなことで、このトルストイの自叙伝とも言ふべき「青年時代」は、ぼくの興味をひいた。

この本を読み終えて特に強く感じたことは、この本の主人公であるニコレニカの生き方と性格である。とにかくこのニコレニカは、空想するのが好きである。そして現実と自分の空想をいっしょにし、空想通りに自分で実際に芝居をする。もし、その空想を邪魔した人がいたらその人を憎むというのだから、さすがにぼくもこれにはたじろいでしまう。

そして、このニコレニカは実に他人の目を気にし、目立つのが好きな青年なのだ。自分でも「僕は、他人の前では品をよくする傾向がある。」と言っている。また、親友の家に行った時でさえも、自分の個性と知性を示そうと、平気ですぐばれる嘘をついている。この平気で嘘をつくというのは別にして、最初の他人の目を気にするというのは、ぼく自身もそうだし、人間ならだれでもこんなことはしていることだろうと思う。

ニコレニカは、自分に対して数々の規律を作っていたが、その多さにぼくは驚ろかされた。賭博の時に自分のとるべき態度とか、勝負のし方とか、人に尋ねられた時の答えまでも、実に詳細に作っている。こんな風に、たくさん規律を作ってしまったら、これを守れなかった場合どうなるのかを考えたことがあるのだろうか。当然、自己嫌悪と、自分に対する批判でいっぱいになるだろう。しかし、こういうことは誰もが青年時代に経験することであろう。が、このニコレ

ニカの場合は、自分に対する厳しい批判が徹底しているのである。

次に、特に強く感じたことは、彼の育った貴族社会の環境に対して、非常に批判的であることだ。ニコレニカは、人間を分類するのに「品のよい人間」と「品のよくない人間」とに分けている。第二の種類は、さらに「品のよくない人間」と「ただの庶民」とに分けた。品のよい人間は尊敬し、自分と対等の関係を持つ資格があると見なし、第二の種類の人間を軽蔑しているふりをしていたが、実際は人格を侮辱されたような感情を覚え、そして憎んだ。彼自身は品のよい人間になるために驚嘆させられるべき努力をしていた。16歳という青年時代の真っただ中をこんな概念を身につけるために努力し、時間を費やしたことを考えると、驚かされるばかりでなく、恐怖感さえ感じる。

ところが、この青年はこのままこの概念を持ったまま一生を過ごすのだろうかと思うと、そうではなかった。品のよい人間ではない大学の友人との交流。当然のごとく彼らを軽蔑するつもりだったが、彼らの誠実さ、素直さ、知識の豊富なことを、自分でも知らない間に尊敬していったのだ。ぼくは、やはりニコレニカも普通の青年だったのだと、ほっと安堵の溜息をついた。そして、ニコレニカは、次第に自分の今までの行動に悔恨を感じていくのだった。

この作品は、トルストイの青年時代の回想をもとに書かれたものだが、彼がその後どのように過ごしていたかは分からない。しかし、今日、彼の名がこの世に残っているのは、自分の今までの過去を反省していきながら、本当の幸福へと歩いていったからではないかと思う。「青年時代」はまさに、後悔、憎悪、苦悩、反省、などこの感情の繰り返しなのだ。

図書館利用状況一覽

I 56年～58年度 3ヶ年学生利用状況

NDC分類	利用冊数 年度	実 数			%		
		56年度	57年度	58年度	56年度	57年度	58年度
総 計	記 数	579	282	191冊	5.0	4.6	3.2
哲 学	学 部	708	272	317	7.0	4.4	5.3
歴 史	地 理	156	256	174	1.5	4.0	2.9
社 会 科	学 部	204	156	79	2.0	3.0	1.4
自 然 科	学 部	2,405	1,416	1,247	23.0	23.0	20.7
工 学	技 術	4,956	3,181	3,619	48.0	52.0	60.2
産 業	学 部	10	2	2	-	-	-
芸 術	体 育	49	27	32	0.5	0.4	0.5
語 学	学 部	103	38	55	1.0	0.5	0.9
文 学	学 部	1,222	514	296	12.0	8.0	4.9
合 計		10,392	6,144	6,012	100	100	100

II 58年度利用概況

開館日数	243日
総入館者	35,889人
1日平均	148人
1日帯出人員	25人
1日帯出冊数	25冊

III 58年度利用人員(科・学年別)

学科	学年	利用人員					計	%
		1	2	3	4	5		
機 械	1	81	120	1,188	384	413	2,186	36.5
	2	276	201	735	560	369	2,141	35.8
化 学	1	80	171	269	383	51	354	15.9
	2	29	26	112	284	254	705	11.8
合 計		466	518	2,304	1,611	1,087	5,986	
%		7.8	8.7	38.4	26.9	18.2		100

IV 昭和58年度学年別・分類別利用冊数

分類	1年		2年		3年		4年		5年		計	%
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%		
総記	30	6.5	8	1.5	36	1.6	69	4.4	48	4.1	191	3.2
哲学	130	28.3	7	1.3	11	0.5	156	9.9	13	1.1	317	5.3
歴史・地理	33	7.2	103	19.4	9	0.4	25	1.6	4	0.3	174	2.9
社会科学	8	1.7	13	2.5	6	0.2	40	2.5	12	1.2	79	1.4
自然科学	87	18.9	140	26.4	602	26.4	298	18.9	120	10.3	1,247	20.7
工学技術	106	23.0	198	37.4	1,514	66.3	867	54.9	934	80.4	3,619	60.2
産業	1	0.2	0	0	0	0	0	0	1	-	2	-
芸術・体育	2	0.4	8	1.5	9	0.4	13	0.8	0	-	32	0.5
語学	5	1.1	7	1.3	12	0.6	25	1.6	6	0.5	55	0.9
文学	58	12.7	46	8.7	83	3.6	85	5.4	24	2.1	296	4.9
合計	460	100	530	100	2,282	100	1,578	100	1,162	100	6,012	100

新着図書目録

☆印は図書館、他は各教官の研究室に所在するものを分類別受入順に記載

総記

朝日新聞縮刷版 昭和58年11月～12月号
朝日新聞社☆

朝日年鑑 昭和59年度版 同 ☆

人類の知的遺産
27 イグナティウス・デ・ロヨラ 講談社☆

講座情報と図書館
5 情報システム論 雄山閣出版☆

7 情報提供論 同

東洋文庫
429 パークス伝 平凡社☆

大専典 desk 講談社

哲学

内村鑑三全集
39 書簡四 岩波書店☆

講座日本思想
3 秩序 東京大学出版会

ベコン随想集 岩波書店☆

岩波講座 精神の科学
9 創造性 同 ☆

ルソー全集 12 白水社☆

浅田彰 構造と力 勁草書房

トハラレグット
紳士道と武士道 サイマル出版会

歴史

国史大辞典 4 きーく 吉川弘文館☆

報瀬良明
地図を遡って 今古書院

明治ニュース事典
ⅢⅣ 明治16年～明治25年
毎日コミュニケーション☆

社会科学

W・ウルマン
中世ヨーロッパの政治思想 御茶の水書房

ジェンナーロ・サッソ
若きマキアヴェッリの政治思想 創文社

F・W・メイトランド
イングランド憲法史 同

日本民俗文化大系
7 演者と観客 小学館☆

マックス・ヴェーバー
職業としての政治 岩波書店☆

小玉陽一
システム・ダイナミクス入門
ブルーバックスB557 講談社☆

自然科学

恒藤敏彦
弾性体と流体(物理入門コースB) 岩波書店

飯下信 彗星と星間物質 地人書店☆

兼古昇 セイファート銀河 同 ☆

カラー天文百科 平凡社☆

広瀬立成
真空とはなにか ブルバックスB555 講談社☆

林知己夫他
あいまいさを科学する ☆ B556 同 ☆

神戸博太郎
熱分析 講談社

武藤義一
イオンクロマトグラフィー 同

森村英典
確率・統計 同

早川毅 現代人の統計5 実験計画法の基礎 同

佐和隆光
回帰分析 同

G.L.ラム
ソリトン理論と応用 培風館

Compton
化学I その本質の理論 東京化学同人

同 化学II 人間社会とのかかわり 同

Cartmell
エンジニアのための化学 同

Moore 環境理解のための基礎化学 同

Kelly 化学者のための実用数学 同

Lrich 化学英語・英語らしい表現とその使い方 同

同 化学英語・論文と手紙の書き方 同

石川馨 化学者および化学技術者のための統計的方法 同

田中正朝
バイオインダストリー 現状と展望 講談社

医学生物学電子顕微鏡観察法 丸善

電子顕微鏡生物試料作製法 同

Hayat 医学生物学のための走査電子顕微鏡入門 同

Abraham
Hおよび¹³C NMR概説 化学同人

Cabal Seminar 77-79
79-81 Springer

Dudd The core model
Cambridge, University Press

Tarski Symposium 1971
American Mathematical Society

Higher transcendental functions
I-III Krieger

工 学

基本機械設計図集 日本機械学会
 J S M E 日本機械学会基準
 弾塑性破壊靱性 J L C 試験方法 同
 森川敬治他
 流れ学 朝倉書店
 J I S ハンドブック
 ポンプ 1982 年 日本規格協会
 竹中俊夫
 機械工学必修 朝倉書店
 宗 孝 実用機械設計法 日刊工業新聞社
 戸川作人
 マイコンによる有限要素解析 培風館
 いますぐ使えるセンサの動きと最適利用 技術評論社
 吉村昌一郎
 機械制御のコンピュータ入門 同
 北川賢司
 信頼性の考え方と技術 コロナ社
 塩見弘
 コンピュータリライアビリティ 昭晃堂
 (コンピュータ基礎講座 19)
 道路ハンドブック 建設産業調査会
 桐啓二他
 マイコン制御ハンドロボット パワー社
 薄展ハンドブック オーム社
 大山政一
 トラベルのない倉庫 技術評論社
 太田富士男
 機械現場の保全実務 同
 1 機業作業集
 2 機能装置集
 3 機器整備集
 宗 孝
 機械設備の生産保全 同
 1 据付け施工と初期保全
 2 創意と工夫の改良保全
 濱田吉枝
 機械保全作業活用ハンドブック 同
 歌川寛他
 機械材料の実用知識 同
 1 切削 塑性加工用金属材料
 2 溶接 耐食・焼結用金属材料
 北川賢司
 技術文書の書き方・まとめ方 同
 機械現場の基礎電気 同

1 機械まわりの電気入門
 山田義昭
 機械現場の基礎物理 技術評論社
 1 はじめて学ぶ材料力学
 2 * 工業力学
 森山勉吉
 測定工具の使い方、生かし方 同
 渡辺昭復
 はじめて学ぶ機械製図法 同
 技能検定1.2級機械仕上げの総合研究所上 同
 * * * 下 同
 技能検定1.2級機械検査の総合研究 同
 * 金属プレス総合研究 同
 望月秀晃
 はじめて学ぶ機械現場の作業計算 同
 土木建設環境問題と地質学 築地書房
 土の物理学 森北出版
 桂謙二 C D プレーヤー入門 コロナ社
 シテムズ
 電子通信回路 マグロウヒル好学社
 土木工事標準環境実 鹿島出版会
 土木工事積算必修 技術書院
 最新版 F I D I C 国際契約書のすべて 海外建設協会
 手塚薫他
 実際に役立つ各種基礎くい耐荷力算定図表 山海堂
 C ジェガー
 岩の力学と工学 土木工学社
 Kirsch
 最適構造設計 丸善
 建造物設計標準 日本鉄道施設協会
 建造物設計標準解説、土構造物 同
 同 基礎構造物及び抗土圧構造物 同
 Great engineers and pioneers in
 technology St. Martin's Press
 榎橋正人
 マイコンによる境界要素解析 培風館
 刀根薫 B A S I C 同
 菅野隆 P C - 6001 プログラミング教室 同
 岡村徳夫
 BASIC to ASSEMBLER C O 出版
 八田四郎次
 化学工学概論 共立出版

中井重行
 プラントエンジニアリング 丸善
 権藤登喜雄
 化学プラント設計の基礎 東京化学同人
 Wranglen
 金属の腐食防食序論 化学同人
 Pfluger
 骨組構造の静力学 技報堂出版
 第16回土質工学研究発表会
 昭和56年度発表講演集 土質工学会
 * 57年度 * 同
 地盤と基礎の地震災害に関するシンポジウ
 ム発表論集 同
 第61期通常総会講演会
 日本機械学会講演文集 日本機械学会
 № 840-1 ~ 840-6 同

芸 術

浮世絵聚花
 ボストン美術館 I 小学館

語 学

The Oxford paperback dictionary
 オックスフォード出版局
 古語大辞典 小学館

文 学

草野心平編
 宮沢賢治研究 I 読摩書房
 * II 同
 解説復元版 宮沢賢治手帳 同
 写真集 宮沢賢治の世界 同
 原色複製ゼロ埋きのゴーシュ 同
 正岡子規
 歌よみに与ふる書 岩波書店
 川崎寿彦
 唇のイングランド 名古屋大学出版会
 カラー図説 日本大歳時記 座右版 講談社



図書館関係今年度の顔触れ

I 図書館委員会(兼)視聴覚教育委員会

- 館長 芋川 平一(一般教科)
 ○副館長 山崎 敷彦(電気工学科)
 委員 中村 好一(一般教科)
 " 佐藤 顕二(機械工学科)
 " 金田 誠(工業化学科)
 " 土居 威男(土木工学科)
 " 篠岡 修治(事務部長)
 " 佐藤 安宏(庶務課長)
 " 加藤 勇(図書係長)

○印は視聴覚主任

II 図書係

- 係長 加藤 勇
 係員 大谷 敦子(整理担当)
 " 山野辺 憲子(受入担当)
 " 原川 艶子(閲覧担当)

III 視聴覚機器担当者

昭和59年度は次の方々です。

- 一般教科 西村 栄
 機械工学科 渡辺 興仁
 電気工学科 猪狩 英男
 工業化学科 芳賀 俊彦
 土木工学科 江尻 勝紀

IV 学生図書委員

科 年	機 械	電 気	化 学	土 木
1	門馬 秀之	浦山 敏	松本 祥英	松村みどり
2	戸井田 淳	草野 弘之	松崎 義春	赤津 敦子 長浜 ミホ
3	金成 守康 小池 次雄	松崎 敏栄	鈴木 学	佐藤良一郎
4	萩原 克利	斎藤 昌仁 鈴木 康寛	田代 寛 平子 文枝	高木 久
5	柿沢 哲也	歌川 欽也	鈴木 淳 渡辺 知幸	後藤 崇

